

## ポーラ美術館コレクション選

ポーラ美術館（箱根・仙石原） 24. 12. 14～25. 05. 18

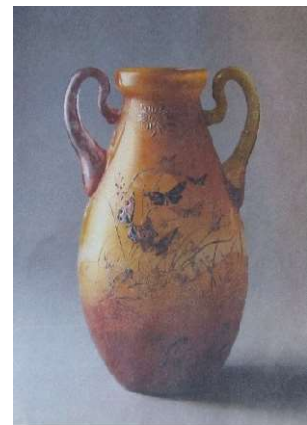
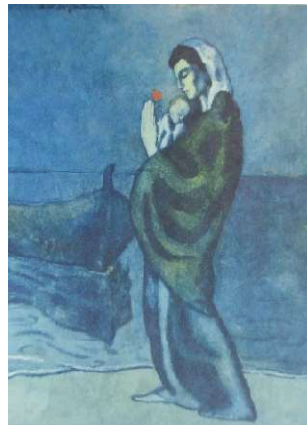
本展は、当館の収集品のなかから「かたち」にまつわる作品を紹介している。

「ポール・セザンヌ」は、故郷であるプロヴァンス地方の自然をこよなく愛し、「自然を円筒、球、円錐によって扱いなさい」との言葉を残している。

この観察した自然を純粋な形態へと還元し、造形による自律的な絵画空間の構築を目論んだ言葉は、20世紀初頭の新たな美術運動の進展に拍車をかけた。

「パブロ・ピカソ」は、「セザンヌ」の独創的な表現を目の当たりにして、「かたちの冒険」をさらに押し進めて、描く対象である現実を多角的な視点から観察したうえで解体したのちに、幾何学的な形態で再構成するというキュビズムの手法で時代の寵児（ちょうじ・流行児）となり、第一次世界大戦後の古典主義への回帰を経て、いっそう自由な形態への探求へと歩みを進めた。

他に、コレクションの中から「彫刻」や「ガラス工芸」といったさまざまなジャンルや時代に特有な「かたち」を求めた「選りすぐりの作品」を展示している。



ポール・セザンヌ 《アルルカン》 1888～90年 油彩/カンヴァス 左

「アルルカン」を描いた4点のうちの1点で、扮しているのは息子で灰色を基調とし、緑、青、紫褐色が混ぜられた壁面と赤みがかった床では、赤と黒の菱形模様の衣裳を着て帽子をかぶり、左手にバトンを持つ彼を際立たせている。

パブロ・ピカソ 《海辺の母子像》 1902年 油彩/カンヴァス 中

画伯の絵には、どれも一目でわかる個性があるが、本作品は、最初のピカソの描き方の“青い色調の絵”であった。

エミール・ガレ 《草花文耳付花器》 1895年頃 右

透明地に白、赤、黄の3色を重ねた4層被せガラスで、貴金属箔をガラス層に挟み込むサンドイッチ技法が用いられて、豪華な雰囲気演出している。